

物のいわれ

楠山正雄

青空文庫

目次

物のいわれ（上）

そばの根はなぜ赤いか

猿と蟹

狐と獅子

蛙とみみず

すずめときつつき

物のいわれ（下）

ふくろうと鳥

蜜蜂

ひらめ

ほととぎす

鳩

物の^{もの}いわれ (上)

そばの根^ねはなぜ赤^{あか}いか

あなたはおそばの木を知っていますか。あんなに真つ白な、雪のようなきれいな花が咲くくせに、一度畑に行つて、よくその根をしらべてごらんさい。それは血のように真つ赤です。いったいおそばの根は、いつからあんなに赤く染まつたのでしょうか。それにはこんなお話があるのです。

むかし、三人の男の子を持つたおかあさんがありました。総
 領が太郎さん、二ばんめが次郎さん、いちばん末つ子のごく小
 さいのが、三二郎さんです。

ある日、おかあさんは、町まで買い物に出かけました。出掛け
 におかあさんは、三人の子供を呼んで、

「おかあさんは町まで買い物に行つて来ます。じき帰つて来ますから、三人で仲よくお留守番をするのですよ。戸をしつかりしめて、みんなでおとなしくうちの中に入つておいでなさい。ひよつとすると悪い山姥が、おかあさんの姿に化けて、お前たちをだましに来ないものでもないから、よく気をつけて、けつして戸をあけてはいけません。山姥はいくら上手に化けても、声が、しやがれたがあが声で、手足も、松の木のようにがさがさした、真つ黒な手足をしていますから、けつしてだまされてはいけませんよ。」

「といい聞かせました。すると子供たちは、

「おかあさん、心配しないでもいいよ。おかあさんのいうとお

りにして待つ^まているからね。」

といったので、おかあさんは安^{あん}心^{しん}して出て行きました。

ところがじき帰^{かえ}つて来^くるといつたおかあさんは、なかなか帰^{かえ}つて来^こないで、そろそろ日が暮^くれかけてきました。子供^{こども}たちはだんだん心配^{しんぱい}になってきました。「おかあさんはどうしたんだろうね。」とみんなでいい合^あっていますと、だれかおもての戸^とをとんとたたいて、

「子供^{こども}たちや、あけておくれ。おかあさんだよ。お前^{まえ}たちのすきなおみやげを、たんと買^かつて来^きたからね。」

といいました。

けれども子供^{こども}たちは、しやがれたがあが声^{こゑ}をしているから、

おかあさんではない。山姥やまうばが化ぼけて来きたにちがいないと思おもつて、「あけない、あけない、お前まえはおかあさんじゃあないよ。おかあさんはやさしい声こえだ。お前まえの声こえはがあがあしやがれている。お前まえはきつと山姥やまうばにちがいない。」
といいました。

ほんとうにそれは山姥やまうばにちがいありませんでした。山姥やまうばは途とちゆう中で、おかあさんをつかまえて食たべてしまったのです。そしておかあさんに化ぼけて、こんどは子供こどもたちを食たべに来きたのです。けれども、子供こどもたちが入いれてくれないものですから、困こまつて、村むらの油屋あぶらやへ行いつて、油あぶらを一升しよぬす盗ぬすんで、それをみんな飲のんで、喉のどをやわらかにして、また戻もどつて来きて、とんとんと戸とをたたきました。

そして、

「子供たちや、あけておくれ。おかあさんだよ。みんなのすきな
おみやげを、たんと買って来たからね。」

といました。

こんどはそつくりおかあさんと同じような、やさしいいい声で
した。けれども子供たちはまだほんとうにしないで、

「じゃあ、先に手を出してお見せ。」

といました。

山姥が戸のすきまから手を出しましたから、子供たちがさわ
つてみますと、それは松の木のよう^{まつ}に節くれだつて、がさがさし
ていました。子供たちはまた、

「いいえ。あけない、あけない。おかあさんはもつとつるつるして柔らかな手をしている。お前は山姥にちがいない。」

といいました。

そこで山姥は裏の畑へ行つて、芋がらを取つて、手の先にぐるぐる巻きつけました。

そして山姥は三度めにうちの前に立つて、とんとんと戸をたたいて、

「子供たちや、あけておくれ。おかあさんだよ。みんなのすきなおみやげを、たんと買って来たからね。」

といますと、子供たちは中から、

「じゃあ、手をお見せ。ほんとうにおかあさんだか、どうだか、

見てやるから。」

といいました。

山姥やまうばはまた戸とのすきまから手を出だしました。こんどは手がつ
るつるして柔やわらかだったので、それではおかあさんにちがいない
と思おもつて、子供こどもたちは戸とをあけて、山姥やまうばを中ちゆうへ入いれました。

二

おかあさんに化ばけた山姥やまうばは、うちの中ちゆうに入いると、さつそくお
夕飯ゆうはんにして、子供こどもたちがびつくりするほどたくさん食たべて、今こ
夜んやはくたびれたから早はやく寝ねようといつて、いつものとおすえり末すえつ子こ

の三郎さぶろうを連れて、奥おくの間まに入はいつて寝ねました。太郎たろうと次郎じろうは二人ふたりで、おもての間に寝ねました。

夜中よなかにふと、太郎たろうと次郎じろうが目めを覚さましたと、奥おくの間までだれかが、何なんだかぼりぼり物ものを食たべているようような音おとがしました。それは山姥やまうばが、末すえつ子この三郎さぶろうをつかまえて食たべていたのでした。

「おかあさん、おかあさん、それは何なんの音おとですか。」
と、太郎たろうが聞ききました。

「おなかですいたから、たくあんを食たべているのだよ。」
と、山姥やまうばがいました。

「わたしも食たべたいなあ。」
と、次郎じろうがいました。

「さあ、上げよう。」

と、山姥はいって、三郎の小指をかみ切つて、子供たちの居る方へ投げ出しました。太郎がそれを拾つてみると、暗くつてよく分かりませんが、何だか人間の指のようでした。太郎はびつくりして、そつと布団の中で、次郎の耳にささやきました。「奥に居るのは山姥にちがいない。山姥がおかあさんに化けて、三郎ちゃんを食べているのだよ。ぐずぐずしていると、こんどはわたいたちが食べられる。早く逃げよう、逃げよう。」

太郎と次郎はそつと相談をしていますと、奥ではもりもり山姥が三郎を食べる音が、だんだん高く聞こえました。

その時次郎は布団から頭を出して、

「おかあさん、おかあさん、お小用こように行きたくなりました。」
といいました。

「じゃあ、起きて外そとへ出て、しておいでなさい。」

「戸とがあきません。」

「にいさんにあけておもらいなさい。」

そこで太郎たろうと次郎じろうは逃げ支度じたくをして、のこのこ布団ふとんからはい出して、戸とをあけて外そとへ出ました。空そらはよく晴はれて、星ほしがきらきら光ひかっていました。二人ふたりはお庭にわの井戸いどのそばの桃ももの木きに、なたで切り形がたをつけて、足あしがかりにして木の上のぼまで登のぼりました。そしてそつと息いきを殺ころしてかくれていました。

いつまでたつても、きようだいがお小用こようから帰かえつて来こないので、

やまうば
山姥はそのそさがしに出て来ました。明け方の月がちようど
のぼりかけて、庭の上はかんかん明るく見えました。けれどもきよ
うだいの姿はどこにも見えませんでした。さんざんさがしてさが
してきたびれて、のどが渴いたので、水を飲もうと思つて、山
姥が井戸のそばに寄ると、桃の木の上にかくれているきようだ
いの姿が、水の上にはつきりとうつりました。

「小用に行くなんて人をだまして、そんなところに上がっている
のだな。」

と、山姥は木の上を見上げて、きようだいをわかりました。
その声を聞くと、きようだいはひとちぢみにちぢみ上がつてしま
いました。

「どうして登のぼった。」

と、山姥やまうばが聞ききますから、

「びんつけを木になすつて登のぼったよ。」

と、太郎たろうがいました。

「ふん、そうか。」

といって、山姥やまうばはびんつけ油あぶらを取とりに行いきました。きようだ

いが上でびくびくしていると、山姥やまうばはびんつけを取とつて来きて、

桃ももの木にこてこてなすりはじめました。

「それ、登のぼるぞ。」

といいながら、山姥やまうばは桃ももの木に足あしをかけますと、つるり、び

んつけにすべりました。それからつるつる、つるつる、何なん度も何な

度んどもすべりながら、それでも強ごうじよう情じように一間けんばかり登のぼりましたが、とうとう一ひといき息いきにつるりとすべって、ずしんと地じびたにころげ落おちました。

すると次郎じろうが上から、

「ばかな山姥やまうばだなあ、びんつけをつけて木のほに登のぼれるものか。な
たで切り形がたをつけて登のぼるんだ。」

といつて笑わらいました。

「そのなたはどうした。」

と、山姥やまうばが聞ききますから、

「あなたは井戸いどのそこに入はいっているよ。」

と、次郎じろうはいつてまた笑わらいました。

山姥やまうばは井戸いどのそこをのぞ

いてみましたのおきしたが、とても手がとどかないので、くやしがつて、物も置かまから鎌かまをさがして来て、桃もも木ものびんつけけずを削り落おとして、
 新あたららきき切きり形がたをつけはじめました。山やままううばばが桃もも木もに切きり形がたをつ
 けはじめたのを見みて、きようだいは心しん配ぱいになつてきました。そ
 のうちどやままううばば山やままううばばは切きり形がたをつけてしまつて、やがてがさが
 さ、やかましい音おとをさせながら登のぼつて来きました。子こ供どもたちは困こま
 て、だたかかだだ高たかい枝えだへ、高たかい枝えだへと、登のぼつて行いきました。とうと
 ういちばん上とのてつとぺんまで登のぼつて行いつて、もうこれより先さきへ行い
 きようがない所ところまで登のぼりましたが、やはり山やままううばばはどどんどん上まま
 で登のぼつて来きます。困こままりりきつてしまつて、二ふたたりりはおおおぞぞらら見みああげな
 がら、ありつたけの悲かなしい声こゑをふりしぼつて、

「お天道さま、金綱。」

とさげびました。

すると、がらがらという音がして、高い大空の上から、長い鉄の綱がぶら下がってきました。太郎と次郎はその綱にぶら下がって、するする、するする、大空まで登って逃げました。山姥はそれを見ると、くやしがつて、同じように空を見上げて、

「お天道さま、腐れ縄。」

と大声を上げてわめきました。

するとすぐ、ぼそぼそという音がして、高い大空の上から、長い長い腐れ縄がぶら下がってきました。山姥はいきなりその

縄なわにぶら下さがって、子供こどもたちを追おつかけながら、どこまでもどこまでも登のぼって行きました。するうち自分じぶんのからだの重みおもで、だんだん縄なわが弱よわってきて、中途ちゆうとからぷつりと切きれました。

山姥やまうばは半分はんぶん縄なわをつかんだまま、高いたか大空おおぞらからまつさかさまに、ちようど大きなそば畑ばたけの真ん中なかに落おちました。そしてそこにあつた大きな石いしにひどく頭あたまをぶつつけて、たくさん血ちを出だして、死しんでしまいました。その血ちがそばの根ねを染そめたので、いまだにそれは血ちのように真まっ赤かな色いろをしているのです。

猿さると蟹かに

ちようど田植え休みの時分で、村では方々で、にぎやかな餅
 つきの音がしていました。山のお猿と川の蟹が、途中で出会っ
 て相談をしました。

「どうだ、あの餅を一日どろぼうして、二人で分けて食べよう
 じゃないか。」

さつそく相談がまとまって、猿と蟹は餅を盗み出すはかりご
 とを考えました。

一軒のうちへ行ってみると、うち中の人が残らずお庭へ出て、
 ぺんたらこ、ぺんたらこ、夢中になって餅をつけていました。
 お座敷には赤んぼが一人寝かされたまま、だれもそばには居ませ
 んでした。

蟹はその時、のそのそと縁がわからはい上がって行って、赤ん
 ぼの手をちよきんと一つはさみました。すると赤んぼはびっくり
 して、痛がつて、「わつ。」と火のつくように泣き出しました。
 お庭に出ていた人たちは、どうしたのかと思つて、びっくりして、
 臼も杵も残らずほうり出して、お座敷へかけつけますと、もうそ
 の時分には、蟹はそのそ逃げ出して行ってしまいました。みん
 なは赤んぼがどうして泣いたのか、さつぱり分らないので、ぶ
 つぶついながら、またお庭へ戻つて行きますと、つきかけの餅
 が一臼そつくり、臼のままなくなっていました。みんなは二度
 ばかにされたので、くやしがつて、外へ追つかけて出てみました
 が、こんども何も見えませんでした。

蟹は坂の上まで行って、猿の来るのを待っていますと、猿は大きな臼をころがしながらやって来ました。

「どうだ。うまくいったじゃないか。さあ、食べよう。」
と、蟹がいいいますと、

「うん、なかなか重いので骨が折れたよ。だがこれですぐ食べては、楽しみがなくなっておもしろくないなあ。どうだ、この臼をここからころがすから、二人であとから追っかけて行って、先に着いた者が餅を食べることにしよう。」

と、猿がいました。

すると蟹は口からあぶくを吹きながら、

「猿さん、それはだめだよ。駆けつくらしたって、わたしがお

前まえにかなわなわないことは分わかりきつているではないか。そんなじじの悪わるいことをいわずに、仲なかよく半はん分ぶんずつ食たべよう。」

と、こういいましたが、猿さるは聴きかないで、

「いやならよせ。おれが一人ひとりで食たべてしままう。重おもい思おもいをして、白うすをかついで来きたのはおれだからなあ。」

といいました。

「だって、わたしだあかって赤あかんぼを泣なかして、みんなをだまして、お前まえにしごとをささせてややつたのじじやないか。」

と、蟹かにがいいました。でも猿さるは、

「ぐちをいうな。それよりか駆かけつくらで来こい。」

といって、かままわわず白うすを坂さかの上かみからころがしました。白うすはころ

ころころがって行きました。猿もいっしょに追っかけて行きます。しかたがないので、蟹もむずむずあとからはって行きますと、ちようど坂の中ほどまで行かないうちに、餅は臼の中からはみ出して、道ばたの木の根にひっかかりました。そして、臼ばかりころころ下までころげて行きました。そんなことは知らないものですから、猿もいっしょに臼を追っかけて、どこまでもころがって行きました。

蟹は途中、木の根に白いものが見えるので、ふしぎに思つてそばへ寄つてみますと、つきたての餅でしたから、「これはうまい。」と思つて、一人でおいしそうに食べはじめました。猿はせっかく下まで駆けて行つてみると、空白だったものですから、

がっかりして、

「こらこら、早く餅をころがさないか。」

と下からどなりました。すると蟹はあざ笑つて、

「つきたての餅が坂をころがるものか。今に堅くなつてお鏡餅になつたら、ころがしてやろう。」

といいました。猿は腹を立てましたが、自分からいいだして、したことですから、しかたなしに蟹にあやまつて、おしりの毛を抜いて蟹にやつて、半分餅を分けてもらいました。それでいまだにお猿のおしりには毛がなくなくなって、蟹の手足には毛が生えているのだそうです。

きつね
狐と獅子

むかし、日本にっぽんの狐きつねがシナわたに渡つて、あちらのけだものたちの仲間なかまに入はいつてくらしていました。

ある時とき、けだものたちが、大ぜい森もりの中に集あつまつて、めいめいかつてなじまん話はなしをはじめました。するとみんなの話はなしを聞きいていた獅子ししが、さもさもうるさいというような顔かおをして、

「だれがなんといつたつて、世界せかい中じゅうでおれの威勢いせいにかなう者ものはあるまい。おれが一声ひとこえうなれば、十里四方ほうの家いえに地震じしんが起おこつて、鍋釜なべかまに残のこらずひびがいつてしまう。」

といました。

すると、虎とらが負まけない気きになつて、

「なんの、おれがひとはしはし一走り走れば、千里のやぶもひと一飛ととびだ。くやしがつても、おれの足あしにかなうものはあるまい。」

といいました。

その時とき、日に本っぽんの狐きつねも、負まけない気きになつて、

「どうして、からだこそ小さくつても、君きみたちに負まけるものか。」
といばつていいました。

すると、獅し子しがおこつて、

「生意なまい気きをいうな。ちつぽけな国くにに生うまれた小狐こぎつねのくせに。よし、そこにじつとしていろ。一つおれがうなつてみせてやるから。よきさまのちつぽけな体からだなんか、ひとちぢみにちぢんで、ごみのよ

うに吹ふツ飛とんでしまうぞ。」

こういいながら、獅し子しはおなかに力ちからを入れて、一ひと声こえ「うう。」

とうなりはじめました。さすがにいばつただけのことはあつて、それはほんとうに、そこらに居いる者ものの体からだごと、吹ふき飛とばしそうな勢いきおいでしたから、狐きつねはあわてて、地じびたに小あなさな穴あなをほつて、その中に小こさくなつて、もぐり込こみました。そして、うなり声こえがやむと、ひよいと中ちゆうから飛とび出だして来きて、

「なんだ、獅し子しさん、大たいそういばつたが、それだけのことか。ごみのように吹ふき飛とばされるどころか、このとおり貧びんぼう乏ぼうゆるぎもしないよ。」

とさんざんにあざけりました。すると獅し子しは、こんどこそ、ほ

んとうにからだじゆう体中の毛を逆立てておこつて、力ちからいっぱい意気張いきばつて、一ひとこえ声「うう。」とうなりますと、あんまり力りきんだひようしに、首くびがすぽんと抜ぬけてしまいました。狐きつねは、そこでいよいよとくいになつて、こんどは虎とらに向むかい、

「どうしたね。わたしにさからえば、獅子ししだつてこのとおりだ。

君きみもいかげんにおそれるがいいよ。」

といいますと、虎とらはなかなか承しょうち知ちしないで、

「よし、そんなら千里りのやぶを、かけっこしよう。」

といいました。狐きつねは困こまった顔かおもしないで、

「うん、いいとも。」

といって、さつそく競きよう争そうの支したく度どにかかりました。やがて一、

二、三のかけ声で、虎と狐は駆け出したと思うと、狐はひよいとうしろから虎の背中に、のっかってしまいました。虎はそんなこととは知りませんから、むやみに駆けるわ、駆けるわ、千里のやぶもほんとうに一ツ飛びで飛んで行ってしまいますと、さすがに体らだじゅうおおあせ

中 大汗になっていました。するとそれよりも先に狐は、ひよいと虎の背中から、飛び降りて、二三間前の方で、

「おいで、おいで。」

をしていました。それで虎も勝負に負けました。

狐は大いばりで獅子の首を背負って、日本に帰って来ました。これが、今でも、お祭りの時にかぶる獅子頭だということです。

かえる
蛙とみみず

むかし、むかし、
 大^{おお}昔^{むかし}、神^{かみ}さまが大^とぜいの鳥^{とり}や、虫^{むし}やけだ
 ものを集^{あつ}めて、てんでんが毎^{まい}日^{にち}食^たべて、命^{いのち}をつないでいくもの
 をきめておやりになりました。何^{なん}万^{まん}という生^いき物^{もの}が、ぞろぞろ
 神^{かみ}さまの所^{ところ}へ集^{あつ}まつて来^きて、めいめい、おい渡^{わた}しを受^うけました。
 その中で、蛇^{へび}は、いちばんおなかをすかしきつていて、ひよろひ
 よろしていましたから、だれよりもおくれで、みんなのあとから
 のたりのたりはって行きました。すると、そのあとから、蛙^{かえる}がび
 よんぴよん元^{げん}氣^きよくとんで来^きました。蛙^{かえる}はずんずん蛇^{へび}を追^おいこし
 て、

「蛇^{へび}さん、ずいぶんのろまだなあ。おいらのしりでもしやぶるが
いい。」

と悪^{わる}口^{ぐち}をいいながら、またずんずん行^いってしまいました。蛇^{へび}
はくやくしくつてたまりませんけれども、どうにもならないので、
だれよりもいちばんあとにおくれて、のろのろついて行きました。
蛇^{へび}が神^{かみ}さまの前^{まえ}に出^でた時^{とき}は、大^{たい}抵^{てい}の生^いき物^{もの}が、それぞれ食^たべ物^{もの}
を頂^{いただ}いて、にこにこしながら、帰^{かえ}って行くところでした。神^{かみ}さま
は、蛇^{へび}がおくれて来^きたのをごらんになって、

「どうしてそんなに遅^{おそ}くなったか。」

とお聞^ききになりました。そこで蛇^{へび}は、おなかがへって、どうに
も早^{はや}く歩^{ある}けなかつたこと、途^{とちゆう}中^{ちゆう}で蛙^{かえる}があとから追^おいついて来^きて、

おしりでもしやぶれといったことを残らず訴えました。すると神さまは、大そうおおこりになつて、いったん帰りかけた蛙をお呼びもどしになりました。そして、蛇に向かつて、

「蛙がおしりをしやぶれといったのならかまわない。これから、おなかのへつた時には、いつでも蛙のおしりからまるのみにのんでやるがいい。」

とおつしやいました。そこで蛇は大そうよろこんで、いきなり蛙をつかまえて、おしりからひとのみにのんでしまいました。これで蛇の食べ物がありましたので、神さまがお帰りになろうとしますと、小さな声で、

「もし、もし。」

と呼びながら、地の中から出て来たものがありました。それは、目の見えないみみずで、目が不自由なものですから、こんなに来るのに手間をとってしまつたのです。

「もし、もし、神さま、わたくしは、何を食べたらよろしゅうございましょうか。」

とみみずがいいました。神さまのお手には、なんにももう残つてはいませんでした。そこで、めんどろくさくなくて、

「土でも食べていろ。」

とおつしやいました。すると、みみずは不足そうな顔をして、「土を食べてしまつたら、何を食べましょうか。」

としつつこくたずねました。すると神さまはかんしやくをおお

こしになつて、

「夏の炎なつ天えんてんにやけて死しんでしまえ。」

とおしかりつけになりました。そこで、みみずは土つちを食くつて生いき、夏の炎なつ天えんてんに出ると、やけ死しんでしまうのだそうです。

すずめときつつき

むかし、すずめがせつせと鏡かがみに向むかつて、おはぐろをつけていますと、おかあさんが死しんだという知しらせが来きました。びっくりして、おはぐろを半はんぶん分ぶんつけかけたまま、すずめはおかあさんの所ところへ駆かけつけて行いきました。神かみさまはすずめの孝こうこう行こうなことをお

ほめになつて、

「すずめよ、毎年まいねんこれから稲いねの初穂はつほをつむことを許ゆるしてやるぞ

。」

とおつしやいました。でもおはぐろは、つけかけたまま途中とちゆうでやめたので、すずめのくちばしは、いまだに下だけ黒くろくつて、上の半分はんぶんはいつまでも白いままです。

それとはちがつて、きつつきは、おかあさんの死しんだ知しらせが来きても、鏡かがみに向むかつて紅べにをつけたり、おしろいをぬつたり、おしやれに夢むちゆう中ちゆうになつていて、とうとう親おやの死しに目めに合あわなかつたものですから、神かみさまがおおこりになつて、

「お前は木まの中の虫むしでも食たべているがいい。」

とお申し渡しもうわたになりました。それできつつきはいつも木の枝えだから枝えだを渡りわた歩いて、ひもじそうに虫むしをさがしているのです。

物のいわれ (下)

ふくろうと鳥からす

むかし、ふくろうという鳥とりは、染物屋そめものやでした。いろいろの鳥とりがふくろうの所ところへ来ては、赤あかだの、青あおだの、ねずみ色いろだの、るり色いろだの、黄色きいろだの、いろいろなきれいな色いろに体からだを染そめてもらいま

した。鳥からすがそれを見て、うらやましがって、もともと大たいそうなおしやれでしたから、いちばん美しい色いろに染そめてもらおうと思おもって、ふくろうの所ところにやって来きました。

「ふくろうさん、ふくろうさん。わたしの体からだを、何なにかほかの鳥とりとまるでちがった色いろに染そめて下ください。世界せかい中の鳥じゆうとりをびつくりさせてやるのだから。」

と、鳥からすがいました。

「うん、よしよし。」

とふくろうは請うけ合あって、さんざん首くびをひねって考かんがえていました。が、やがて鳥からすをどつぷり、真まつ黒くろな墨すみのつぼにつつ込こみました。

「さあ、これでほかに類るいのない色いろの鳥とりになった。」

とふくろうはいいながら、からす鳥を引き上げてやりました。からす鳥はどんな美しい色いろに染そまつたろうと、たの楽しみにしながら、いそ急いで鏡かがみの前まえへ行まつて見みますと、おどろまあ、驚おどろきました、あたま頭あたまからしつぽの先さきまで真まつ黒くろくろ々と、目はなも鼻わも分わからないようになっておこりながら、せんか。そこで鳥からすは、よけい真まつ黒くろになつておこりながら、「何なんだつてこんな色いろに染そめたのだ。」

といいますと、ふくろうは、

「だつて外ほかに類るいのない色いろといえ、これだよ。」

といつて、すましていました。からす鳥はくやしがつて、

「よしよし、ひとをこんな目に合あわせて。今いまにきつとかたきをとつてやるから。」

とうらめしそうにいいました。

その時ときから鳥からすとふくろうとは、かたき同土どうしになりました。そしてふくろうは鳥からすのしかえしをこわがって、昼間ひるまはけっして姿すがたを見せません。

蜜蜂みつばち

むかし、むかし、おおむかし大昔かみ、神さまがいろいろの生き物ものをお作つくりになった時ときに、たくさんの蜂はちをお作りになりました。そのたくさんの蜂はちの中に、蜜蜂みつばちだけが針はりを持もっていますませんでした。蜜みつば蜂ちは不足ふそくそうな顔かおをして、神かみさまの所ところへ行いって、

「ほかの蜂はちはみんな針はりを持っておりませんが、わたくしだけは針はりがありません。どうか針はりをつけて下さいくだい。」

「いいました。」

「いいや、お前まえは人間にんげんに飼かわれるのだから、針はりはいらない。ぜひほしいというなら、針はりをやってもいいが、人間にんげんを刺さすことにはならないぞ。もし間違まちがえて刺さしたら、針はりが折おれて、命いのちがなくなるぞ。」

と、神かみさまがおっしゃいました。

「けっして刺さしませんから、どうぞ針はりを下さいくだい。」

と、蜜蜂みつばちがいました。

「それなら針はりをやろう。」

と、神さまがおつしやつて、蜜蜂に針を下さいました。そこで約束のとおり、蜜蜂には針はあつても、人間を刺しません。刺せば針が折れて、命がなくなるのです。

ひらめ

むかし、いじの悪い娘がありました。ほんとうのおかあさんは亡くなつて、今のは後から来たおかあさんでした。それで何かいけないことをして、おかあさんにしかられると、おかあさんが自分にくらしがつてしかるのだと思つて、いつもうらめしそうに、おかあさんをにらみつけていました。

ところがあんまりおかあさんをにらみつけていたものですから、
 いつの間にか目がだんだんうしろに引っ込んで、とうとう背中せなかの
 ほうまわに回ってしまいました。そして娘むすめはひらめというお魚さかなになつて
 しまいました。

そういえばなるほど、ひらめというお魚さかなは、目が背中せなかについて
 います。ですから今いまでも、親おやをにらめると、平目ひらめになるといつて
 いるのです。

ほととぎす

むかし、二人ふたりのきょうだいがありました。弟おとうとの方は大たいそうき気立だ

てがやさしくて、にいさんおも思いでしたから、山へ行いつてお芋いもを取
つて来くると、きつといちばんおいしそうなところを、にいさんに
食たべさせて、自分じぶんはいつもしつぽのまずいところを食たべていまし
た。けれどもにいさんは目みが見えない上に、ひがみ根こんじょう性が強つよ
かつたものですから、「弟おとうとがきつと自分じぶんにかくしていいところば
かり食たべて、自分じぶんには食くいあましをくれるのだろう。ひとつおな
かを裂さいて見みてやりたい。」と思おもつて、とうとう弟おとうとを殺ころしてしま
いました。

けれども弟おとうとのおなかの中には、お芋いものしつぽばかりしかはいっ
ていませんでした。正しょうじき直おとうとな弟おとうとを疑たぐつていたことがわかると、
にいさんは大たいそう後こうかい悔かいして、死しんだ弟おとうとの体からだをしつかり抱だきしめ

て、血ちの涙なみだを流ながしながら泣ないていました。

すると、死しんだ弟おとうの体からだから羽はねが生はえて、鳥とりになつて、

「がんくう。がんくう。」

と鳴ないて、飛とんで行いきました。

「がんこ」というのはお芋いものしつぽという事ですおとうと。弟おとうとは「お芋いものしつぽをたべている。」ということを、「がんくう。がんくう」といつて、鳴ないたのでした。

すると兄あにはいよいよ弟おとうとがかわいそうになつて、これも鳥とりになつて、

「ほつちよかけたか、おつととこいし。」

と、鳴なき鳴なき弟おとうとのあとを追おつて飛とんで行いきました。

毎年まいねんうの花はなの咲さくころになると、暗くらい空そらの中で、しぼるよう
 な悲かなしい声こえで鳴ないて飛とびまわっているほととぎすは、人によつて
 「がんくう。がんくう。」と鳴ないているようにも聞きこえますし、
 「ほつちよかけたか、おつととこいし。」と鳴ないているようにも
 聞きこえます。これは鳥とりになつたきようだが、やみ夜よの中で、い
 つまでも呼よび合あっているのだということですよ。

鳩はと

鳩はともむかしは親おやふこう不孝ふこうで、親おやのいうことには、右みぎといえ左ひだり、
 左ひだりといえ右みぎと、何なにによらずさからうくせがありました。ですか

ら、親鳩おやぼとは子鳩こぼとに山へ行つてもらいたいと思ふ時には、わぎと今日きょうは畑はたけへ出てくれといいました。畑はたけへ下りてもらいたいと思ふおもときときには、わぎと、今日きょうは山へ行つてくれといいました。

いよいよ親鳩おやぼとが死ぬしとき、死しんだら山のお墓はかに埋うめてもらいたいと思つて、その時ときもわぎと、

「わたしが死しんだら、川の岸きしの小石こいしと砂すなの中に埋うめておくれ。」
 といひ残のこしました。

親鳩おやぼとに別わかれると、子鳩こぼとは急きゆうに悲かなしくなりました。そしてどこそは親おやのいいつけにそむくまいと思つて、そのとおかり河原かわらの小石こいしと砂すなの中に、親おやのなきがらを埋うめて、小さなお墓はかを立てたました。

ところが川のそばですから、雨がふって、水がふえて、河原に水が流れ出すたんに、小石と砂がくずれ出して、お墓もいっしよに流れていきそうになりました。子鳩はよけい親鳩をこいしがって、ぽっほ、ぽっほといつまでも悲しそうになりました。

せっかく孝行な子供になろうと思つても、親のいなくなつたのを、鳩は今でもくやしがつているのだそうです。

青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

※底本の「物のいわれ（上）」「物のいわれ（下）」をひとつに
まとめました。

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年9月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

物のいわれ

楠山正雄

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>